

日本豊受自然農 シンポジウム

腸内細菌と土壤微生物の関係を明らかに

抗生物質で腸内細菌数減少

自然農業の必要性説く

良い腸内環境つくりを

ネット配信などで延べ三千名参加

コロナウイルス感染の事情で京都から東京に会場を移して開催された第9回日本の農業と食を考えるシンポジウムは6月6日、7日にプレシボジウム、シンポジウムを「土と腸は大事！土の土壌菌と人間の腸内細菌は同じだった」をテーマに「有事・災害に最も大事な農と食のシンポジウム」として開催した。プレシボジウムで種苗法改正について反対を表明し、政府の姿勢を質している元農林水産大臣の山田正彦氏を始め世界の食問題研究家の印輪智哉氏などが講演し、種子、種苗の大切さと自家採種の道が閉ざされるのではという心配もあり関心の高さを示すイベントとなった。メインイベントのシンポジウムは「土と腸は大事！土の土壌菌と人間の腸内細菌は同じだった」をテーマに繰り広げられた。



東京会場は満員



大阪からネットで講演

「支える健康」と題して発表。

山谷氏は「野菜が健康に良いのは①栄養素の摂取の感覚的な美味しさ②有害物質の中和・解毒の3つがあげられます。また、免疫ビタミン(LPS)とよばれる土壌微生物の成分の一つを野菜に付着したまま取り入れられます。食は生命の源であり、腸内細菌の多様性を確保する食事として、野菜、果物、全粒穀物を比較的多く摂取することなども大切である」と述べた。

開会の挨拶に立った由井代表は「自然の畑、タネがあればオーガニックの食材、生活用品など90%作れる。今では300種類ものを作り出している」と言いながら「自然な農業、自然な食、自然な環境を取り戻す必要がある。自然農で感謝ということを学んだ」と語り、「私たちの活動を含め、なぜ自然農業が必要なのかを発表していきたいと思えます」と語った。

シンポジウムは山谷雅和氏(ワケンピーテック(株)開発本部執行役員・部長)が「生命食・微生物」

次千島学説・腸造血説 腸で生成 酒向猛医師が詳しく解説

これまで、現代医学では血液は骨髄で造られるという「骨髄造血説」が主流で、血球は腸で造られるという千島医学博士が提唱した「腸造血説」

「腸造血説」を提唱する千島学説では、現代医学の定説である、生体を構成している細胞は、細胞自身が分裂して増殖するという説に対し

「腸造血説」を提唱する千島学説では、現代医学の定説である、生体を構成している細胞は、細胞自身が分裂して増殖するという説に対し

腸に造血細胞がある

腸に造血細胞がある

腸に造血細胞がある

※日本豊受自然農リレ発表は別添。

研究家・自然療法家の野口清美さんが「腸内細菌がよる」が正しい食事・土地柄や季節に応じた伝統食の大切さ」と題してシンポジウムで話した。その土地で採れたものを頂く、身土不二。旬なものを用いた。一つの食材を丸ごとすべていただく、一物全体。食材の組み合わせ、調理の仕方を工夫して陰陽のバランスをとる。

このような事を意識していくことが大事と語り、また、しっかりと噛むことで消化酵素を含む唾液がたくさん出て胃腸の負担も減らすことができるので、よく噛んで感謝しながらいただくように」と語った。

次に豊受会員の雨宮慈子さんから「豊菌ケルトを愛飲して」の体験発表があった。

パッチ博士はエッセンスのタイプについて、単なる性格類型ではなく人の生体タイプに対応したものを「12ヒーローズ」と体系化しており、パッチ博士が考えた12タイプと日本のフラワーエッセンスの12の花ごよみシリーズをむすびついて説明した。パッチが選んだ「12ヒーローズ」と日本のフラワーエッセンスの美しさを比較する見比べながら、各エッセンスの傾向性を「欠点の裏返し」の性質である長所を育むた

母乳をあげるお母さんが良いものを食べて、赤ちゃんの腸内常在菌の状態が良い状態になる時期まで母乳で育てていくことがもっとも望ましいと強調した。

「豊受会員体験発表」 豊受御古園により子供達の成長が促された

母様ご自身も不眠、そして多発性硬化症の症状が出て来た頃、ホメオパシーと出会い、娘さんの症状が薬害によるものでないかと考え、そのような薬害の状態に至らしたの自分だと責めていたとのこと。

CHhom4年制コース8期生の学生でもあり、豊受ホール会員でもある雨宮慈子さんから、豊菌ケルトを家族で飲んで、直観で行動できるようになったことや、目の前に起ることを受け入れて日々淡々と過ごせるようになったという体験発表があった。

その後、来賓発表が続き、フラワーエッセンス研究家の東 昭史氏は「日本の花からつくられたフラワーエッセンスによる癒し」と題して発表

フラワーエッセンスは、イギリスの医師であるエドワード・パッチ博士が、1930年代に開発した花を用いて心を癒す自然療法。

パッチ博士は、もともと腸内細菌の研究を行っており、「腸内環境を保つ

娘さんの妊娠時、切迫早産の危険があり入院中に張り止め薬と抗生物質を点滴するとその副作用で白血球が減少したため、今度はマグネシウムと抗生物質、さらに白血病の治療薬をつかい、その後、娘さんを無事に産まれたものの、体力は落ち、頭ももうろつとしながらの育児では、全く寝てくれない娘さんにつきっきりとなり辛い育児となったそうです。

娘さんの症状は予防接種をする度にひどくなり、1歳になる頃には、自力で便が出せなくなり疳積で毎日泣き叫び、お

そんな時、由井代表がつくられた豊受御古園を(5面へつづく)